

# 1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年5月)

野菜振興部 調査情報部

## 【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万1515トン、前年同月比89.9%、価格は1キログラム当たり312円、同120.5%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万4669トン、前年同月比91.5%、価格は1キログラム当たり291円、同122.3%となった。
- 7月は、今後中心となる北海道産が天候に恵まれて総じて順調であることなどから、価格的には平年並みの展開と予想される。

## (1) 気象概況

上旬は、全国的に低気圧や前線の影響を受けにくく、高気圧に覆われやすかった。気温は、期間の中頃を中心に全国的に暖かい空気に覆われ、平年を大きく上回った時期があった。一方、期間の終わり頃には低気圧通過後に寒気が流入し、西日本を中心に北・東日本でも平年を大きく下回った。このため、旬平均気温は西日本で低かった。北日本、東日本では平年並だった。旬間日照時間は北日本、東日本で多かった。西日本では平年並だった。全国的に曇りや雨の所が多く、期間の中頃には北日本付近を低気圧が、北・東・西日本付近を前線が通過し、西日本太平洋側を中心にまとまった雨が降った日があった。また、7日から8日にかけて北海道地方で雪が降った所もあった。旬降水量は北日本太平洋側と東・西日本日本海側で少なかった。北日本日本海側、東・西日本太平洋側では平年並だった。

中旬は、日本付近は低気圧や前線と高気圧が交互に通過し、天気は周期的に変化した。低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込みやすかった一方、低気圧や前線の後面には寒気が流れ込む時期もあった。気温は、寒気の影響を受けにくかった北日本でかなり高く、旬平均気温平年差が+3.3℃と1946年の統計開始以降、5月中旬として1位の高温となった。また、東日本では高く、西日本では平年並だった。

旬間日照時間は高気圧に覆われた時期もあったことから、西日本日本海側でかなり多く、北日本で多かった。東日本、西日本太平洋側では平年並だった。旬降水量は低気圧や前線の影響を受けやすかった北日本日本海側と東日本で多かった。北日本太平洋側、西日本では平年並だった。

下旬は、北・東・西日本では天気は数日の周期で変わった。気温は、暖かい空気が流れ込む日もあったため、東日本で高く、北日本、西日本では平年並だった。旬間日照時間は北日本日本海側と東日本太平洋側、西日本で少なかった。北日本太平洋側、東日本日本海側では平年並だった。旬降水量は、東日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多く、東日本太平洋側と北・西日本日本海側で多かった。北日本太平洋側では平年並だった。27日から28日にかけては、低気圧や前線の影響で、東・西日本を中心に記録的な大雨となった所があった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側	 	 			日本海側 太平洋側
西日本				日本海側 太平洋側	 	 		日本海側 太平洋側	

資料：気象庁「5月の天候」



(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万1515トン、前年同月比89.9%、価格は1キログラム当たり312円、同120.5%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(5月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	111,515	89.9	88.5	312	120.5	125.0	313	315	305
だいこん	7,289	88.5	89.1	138	151.5	146.8	136	148	133
にんじん	6,822	86.4	88.3	219	135.8	155.2	252	203	207
はくさい	6,271	99.3	97.4	102	120.0	141.8	102	125	84
キャベツ類	14,698	86.1	84.5	170	201.5	180.9	177	208	135
ほうれんそう	1,425	92.3	95.5	504	114.4	121.0	428	574	515
ねぎ	3,645	101.1	99.3	415	99.5	102.6	485	481	458
レタス類	7,406	103.1	108.3	172	109.7	106.9	174	177	166
きゅうり	7,411	92.4	92.8	307	129.5	126.0	321	330	277
なす	2,755	92.1	86.8	432	114.5	113.9	423	422	434
トマト	6,815	86.9	76.9	388	118.2	135.9	371	384	407
ピーマン	2,681	89.5	97.6	605	130.5	141.5	662	590	595
さといも	130	76.3	62.2	496	116.6	128.1	438	514	532
ばれいしょ	7,191	74.7	79.3	236	149.2	123.0	196	221	288
たまねぎ	10,304	84.8	86.0	123	123.0	111.0	125	121	125

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、中旬以降若干落ち着いたものの、絶対量不足により堅調な動きが続き、高めに推移した前年を3割以上上回り、平年を5割以上上回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が、不足感から高値で推移し、その反動により下旬にやや落ち着いたものの、前年の2倍強となり、平年を8割強上回った(図3)。

果菜類は、ピーマンの価格が、茨城産の増量に

向かった中旬以降にやや落ち着きを見せたものの、堅調な動きが続き、高めに推移した前年を3割強上回り、平年を4割以上上回った(図4)。

土物類は、ばれいしょの価格が近年かなり高めの推移となっており、その中でもやや安めに推移した前年を5割近く上回り、平年を2割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

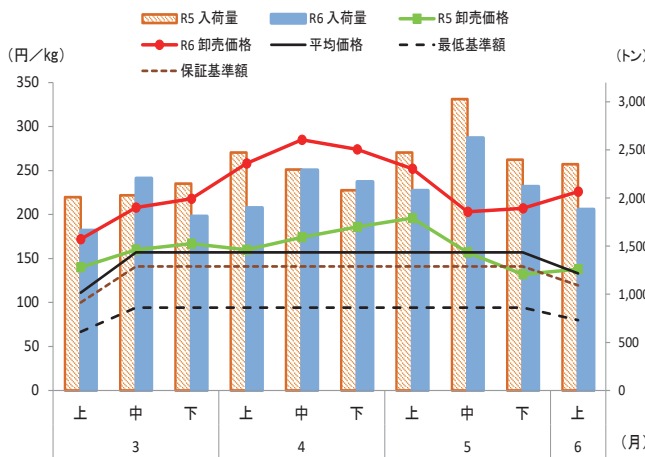


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

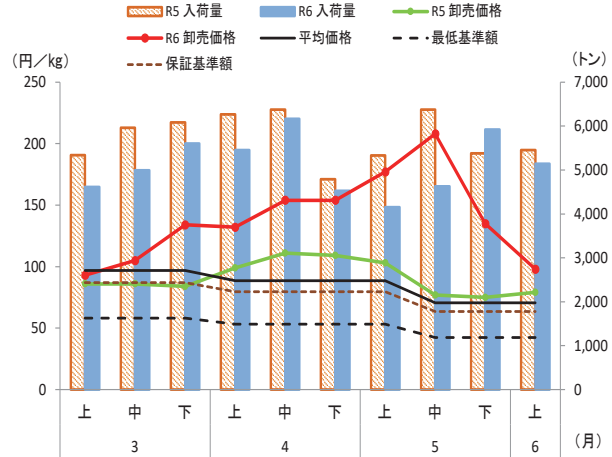


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

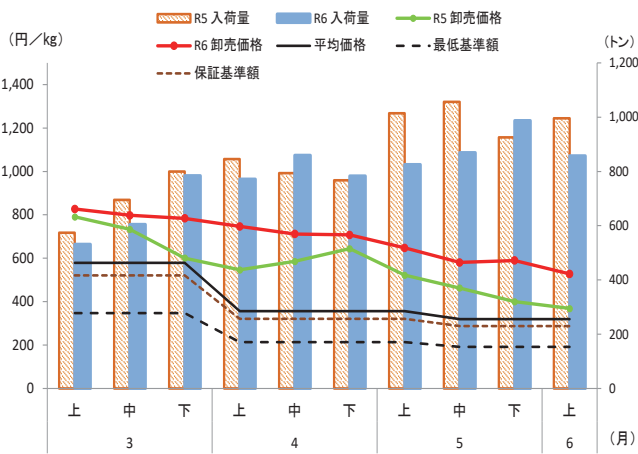
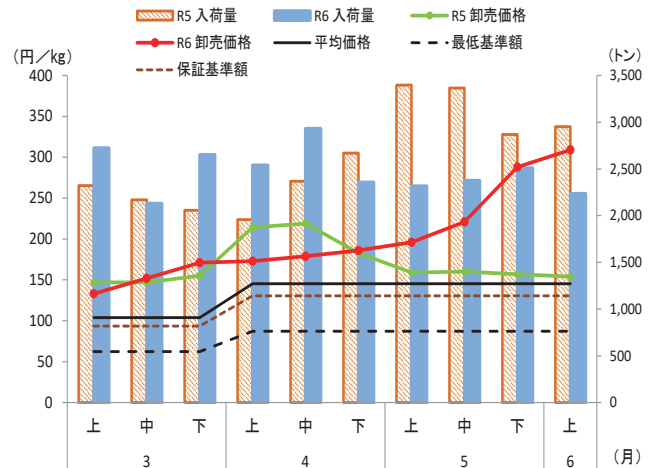


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	5月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、日照不足および低温の影響により生育遅延が見られたが、その後、気温が上昇したため前年並みに戻っている。後続の青森産も融雪の遅れにより若干播種が遅れたものの、おおむね順調であった。総入荷は前年、平年とも1割以上上回った。</p> <p>価格は、入荷量減から堅調な動きが続き、前年を5割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	にんじん 	<p>徳島産を中心に、千葉産の入荷があった。徳島産の作付面積は前年並みで、度重なる降雨と曇天、低温によりやや不安定な入荷となり、下旬にはほぼ切り上がった。千葉産の作付面積は前年並みで、播種期の干ばつ傾向と2～3月の低温と曇雨天により、一部生育遅延もあったが、その後の気温の上昇で回復傾向となった。ただし、降雨の影響により病害が散見された。中国産の輸入は前年を7割近く上回っている。総入荷は前年、平年とも1割以上上回った。</p> <p>価格は中旬以降、若干落ち着いたものの、絶対量不足により堅調な動きが続き、高めに推移した前年を3割以上上回り、平年を5割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。後続の長野産は若干の定植遅れが見られたものの、4月の気温が高く降水も多かったことから順調だった。総入荷量は前年、平年ともわずかに下回った。</p> <p>価格は下旬以降落ち着いたものの、前年を2割上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>千葉産を中心に愛知産、神奈川県などの入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、温暖な天候に恵まれて生育は前進し、やや前倒しの出荷となった。愛知産の作付面積は前年並みで、2月の高い気温により大幅に前進し、切り上がりに向けて減少した。神奈川県産の作付面積は前年並みで、3月の低温の影響により生育はやや落ち着いたものの、前進傾向で下旬に向け漸減した。総入荷量は前年、平年とも1割以上上回った。</p> <p>価格は不足感から高値で推移し、その反動により下旬にやや落ち着いたものの、前年の2倍強となり、平年を8割強上回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産、茨城産を中心に関東産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、3月の低温・多雨により生育はやや不良だった。茨城産の作付面積は前年並みで、気温に恵まれて生育は全体的に前進傾向となった。関東産の高冷地はやや遅れが散見された。総入荷量は多かった前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は関東産の秋冬作が落ち着いた中旬以降上がり、前年を1割以上上回り、平年を2割以上上回った。</p>
	ねぎ 	<p>茨城産を中心に千葉産など関東産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、3月の低温・多雨により生育が遅延し、肥大が悪く、やや細物傾向となった。千葉産の作付面積は前年並みで、定期的な降雨と気温に恵まれ生育はおおむね順調となった。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、極端な増量がなかったことから堅調な動きが続き、前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	レタス類 	<p>群馬産、長野産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、降霜や低温の影響により生育にはばつきが見られた。長野産の作付面積は前年並みで、やや遅れていた生育は4月の気温上昇と定期的な降雨により回復傾向となった。茨城産は下旬でほぼ切り上がった。総入荷量は前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、下旬に向けて緩やかに落ち着き、前年、平年ともかなりの程度上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>埼玉産、群馬産中心の入荷となった。埼玉産の作付面積は前年並みで、加温物、無加温物ともに一部遅延が散見されたが、おおむね順調となった。一部圃場で病害が散見されるも、大きな影響はない。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、病害が散見され、大きな影響はないが天候による出荷量の増減が激しい傾向。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、下旬に向けてやや落ち着いたものの、やや安めに推移した前年を3割近く上回り、平年を2割以上上回った。</p>
	なす 	<p>高知産を中心に群馬産など関東産の入荷があった。高知産の作付面積は前年並みで、曇雨天の影響はあったものの、生育はおおむね順調となった。一部病害が散見され、また一部地域で日焼け果が散見された。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、日焼け果が散見された。総入荷量は少なめに推移した前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、大きな動きはなく安定した推移となり、前年、平年ともかなり大きく上回った。</p>
	トマト 	<p>熊本産、栃木産を中心に愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、4月の天候不順の影響により病害虫が散見され、コナジラミの発生が増加した。栃木産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、やや草勢の弱い株が散見された。愛知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だった。総入荷量は少なめに推移した前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は高めに推移した前年を2割近く上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	ピーマン 	<p>茨城産を中心に宮崎産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、3月の低温の影響により生育が遅延した。若干の着果不良が散見されたが、回復傾向となった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であるが、圃場間で若干のばらつきが散見された。総入荷量は多かった前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、茨城産の増量に向かった中旬以降にやや落ち着きを見せたものの、堅調な動きが続き、高めに推移した前年を3割強上回り、平年を4割以上上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>埼玉産、千葉産、鹿児島産を中心とした入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みで、埼玉産、千葉産の収穫は終了している。夏場の高温・干ばつの影響により年明け以降の残量は少なく、歩留まりも良くない。鹿児島産は天候不順の影響により作業の遅れが見られるが、生育自体はおおむね順調となった。中国産の輸入は前年を大きく上回っている。総入荷量は前年を2割以上下回り、平年を4割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から堅調な動きとなり、やや高めに推移した前年を1割以上上回り、平年を3割近く上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>長崎産を中心に鹿児島産の入荷があった。長崎産の作付面積は前年並みで、降雨の影響により軟腐病などの病害の発生が散見された。鹿児島産の作付面積は前年並みで、生育は順調で大玉傾向であったが、降雨の影響もあり下旬にはほぼ切り上がった。総入荷量は多かった前年を2割以上下回り、平年を2割強下回った。</p> <p>価格は近年かなり高めの推移となっており、その中でもやや安めに推移した前年を5割近く上回り、平年を2割以上上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>佐賀産を中心に北海道産、兵庫産などの入荷があった。佐賀産の作付面積は前年をやや下回り、気温の上昇と適度な降雨により生育は順調で、肥大も良好であったが、4月の断続的な降雨により病害の発生が散見された。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温の影響により作柄が悪く、小玉傾向となり、貯蔵量も少なく終盤を迎えた。兵庫産の作付面積は前年並みで、適度な降雨はあるものの、気温があまり高くないことからやや小玉傾向となった。中国産の輸入は前年を3割弱上回っている。総入荷量は前年、平年ともかなり大きく下回った。</p> <p>価格は月間を通して堅調な推移となり、あまり動きはなく、前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

### (3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万4669トン、前年同月比91.5%、

価格は1キログラム当たり291円、同122.3%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向 (5月速報)



品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	34,669	91.5	91.8	291	122.3	128.9	286	301	287
だいこん	1,890	77.1	79.1	141	169.9	165.7	135	149	139
にんじん	2,207	81.5	84.6	202	146.4	177.2	228	180	196
はくさい	3,041	107.7	112.5	129	120.6	147.6	133	162	102
キャベツ類	4,252	84.0	86.5	178	234.2	203.3	184	216	146
ほうれんそう	438	85.8	84.4	615	110.2	119.9	550	667	629
ねぎ	632	100.8	105.8	518	104.9	113.5	521	516	516
レタス類	1,619	101.7	98.5	186	113.4	110.9	184	202	174
きゅうり	1,661	85.5	99.4	292	126.4	123.6	323	286	275
なす	1,118	94.3	109.0	400	110.5	113.3	399	394	406
トマト	1,651	78.2	74.6	376	117.9	131.8	351	375	401
ピーマン	621	95.6	99.4	595	137.7	157.3	639	575	580
さといも	19	80.0	58.5	629	116.1	126.6	556	662	646
ばれいしょ	3,154	92.7	91.0	232	145.9	125.8	188	227	281
たまねぎ	4,558	92.6	96.2	124	142.5	117.3	121	120	128

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」


注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向 (大阪市中央卸売市場)

類別	品目	5月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>鹿児島産と和歌山産が主体となり、千葉産、長崎産、香川産などの入荷があった。後続の石川産の入荷が下旬にスタートした。九州の各産地が生育期の天候不順の影響により不作となり、出荷量が少ない中で香川産の切り上がりも早く、入荷量が少ない状況が続いた。月間全体では前年、平年とも2割以上上下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から高騰が続き、特に端境となった中旬には前年の2倍以上となった。月間では前年、平年とも6割以上上回った。</p>
	にんじん 	<p>徳島産を中心に長崎産も主体となる入荷であった。各産地とも前進出荷で産地残量が少ない中、天候不順により細物が多く、Mサイズ中心だったことから全旬を通じて入荷量は伸び悩んだ。国産品の不足感から業務用関係を中心に輸入品の引き合いが強まり、中国産の入荷が月間で前年の1.5倍程度となった。全体的には入荷量は旬を追うごとに減少し、月間では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から高騰し、高値推移が続いた。月間では前年を4割以上上回り、平年を8割近く上回った。</p>

<p>葉茎菜類</p>	<p>はくさい</p> 	<p>茨城産が中心となり、中旬以降は後続の長野産の入荷もスタートした。各産地とも作付け減少の影響により出荷量が少ない状況が続いたが、茨城産は前月の遅れた分の産地残量が多く、月間では前年を大きく上回った。後続の長野産も出遅れて中旬は少なく、下旬には適度な降雨により生育が進んだことで回復傾向となって増加したが、下旬としては前年を大幅に下回り、月間では前年の半分以下となった。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は、前月の高値の影響が残る中で、後続産地の出遅れにより中旬に不足感が生まれて高騰したが、下旬には落ち着いて下落した。月間では前年を2割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	<p>キャベツ類</p> 	<p>月の前半は春キャベツの入荷があり、愛知産と兵庫産が主体となり、前月までの出遅れていた分の残量が多く、入荷量は前年を大きく上回った。後続の夏キャベツは、天候不順により肥大が悪く、大玉の比率が少ないことから入荷量は伸び悩んだ。愛知産は月間では前年をかなり下回り、茨城産は潤沢で前年を大きく上回った。キャベツ類全体では旬を追うごとに微増傾向ではあったが、月間では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、品薄感から高値推移となり、加工用関係の需要が高く発注が多かったことにより中旬に高騰し、前年の3倍の価格となった。入荷量微増傾向から下旬には少々落ち着いたが、それでも前年の2倍近い価格となり、月間では前年の2.3倍以上上回り、平年を2倍以上上回った。</p>
	<p>ほうれんそう</p> 	<p>岐阜産が中心となり、福岡産や近隣産地の大阪産などの入荷があった。各産地とも朝晩の気温が低く、生育が進まず産地出荷量が少ない状況が続いた。主力の岐阜産は旬を追うごとに微増傾向も伸びず、月間では前年を大幅に下回った。月間全体では前年、平年ともかなり大きく下回った。</p> <p>量販店、業務用関係ともに発注が多く、引き合いが強まったことから、価格は高値推移となった。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	<p>ねぎ (白ねぎ)</p> 	<p>茨城産と鳥取産が主体となる入荷となった。両産地とも潤沢な出回りで、茨城産は旬を追うごとに増加し、月間では前年を大きく上回った。鳥取産も安定していたが、春物の産地が前進傾向で旬を追うごとに減少し、月間では前年を下回った。月間全体では前年並みとなった。</p> <p>価格は、野菜全体の高値の影響もあり、やや高値推移となった。月間では前年を若干上回った。</p>
	<p>ねぎ (青ねぎ)</p> 	<p>徳島産が中心となり、高知産や静岡産、近隣の大阪産や奈良産などの入荷があった。各産地とも朝晩の気温が低かったため生育が進まず、産地出荷量が少ない状況が続いた。徳島産は旬を追うごとに微減傾向で、月間では前年をかなり下回った。高知産は月の前半が少なく、下旬に回復傾向となるも月間では前年を大幅に下回った。他産地産も伸び悩み、月間全体では前年をかなり下回った。</p> <p>量販店、業務用関係ともに需要が高く、引き合いが強かったことから、高値安定推移となり、月間では前年をかなり上回った。</p>
	<p>レタス類</p> 	<p>玉レタスは、長野産が中心となり兵庫産の残量入荷もあった。気温が低く生育が進まなかったことから上中旬は少なく、下旬には増加したが、月間では前年を下回った。サニーレタスは主力の長野産が中心となり、福岡産の残量入荷もあった。長野産は気温が低かったことにより生育が進まず、産地出荷量は伸び悩んだが、旬を追うごとに増加し、月間では前年をかなり上回った。福岡産は切り上がり早く、下旬にはほとんど入荷がなく、月間では前年の半分程度にとどまった。リーフレタスは長野産が中心となり、福岡産の残量入荷も若干あった。加工・業務用筋からの発注が多く、旬を追うごとに入荷量は増加して全旬を通して多く、長野産は月間では前年を大きく上回った。レタス類全体では、前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>玉レタスの価格は不足感から高値推移となり、中旬に高騰した後、下旬に下落したが、月間では前年をかなり上回った。サニーレタスは前年並みの価格で、リーフレタスは加工・業務用需要が中心ということもあり、旬を追うごとに下落傾向の安値推移となった。レタス類全体では、前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心として高知産などの入荷があった。下旬には後続産地の福島産もスタートした。主力産地は朝晩の気温が低いことにより生育が遅れ、月の前半の入荷は少なかったが、旬を追うごとに回復傾向となった。月間での宮崎産は前年をかなり下回り、高知産は前年を若干下回った。後続の福島産は潤沢なスタートとなり、下旬の入荷量は前年を大きく上回った。月間全体では、前年をかなり大きく下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、不足感と野菜全体の高値の影響により高値推移となった。入荷量の回復と後続産地のスタートにより旬を追うごとに下落傾向ではあったが、量販店での特売需要が多く、引き合いが強まったため、月間全体は前年、平年とも2割以上上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は高知産を中心として大阪産や岡山産などの入荷もあった。長なすは福岡産と熊本産が主体となった。各産地とも朝晩の気温が低いことにより生育が進まず、特に月の前半が伸びなかった。旬を追うごとに回復傾向ではあったが、月間では伸び悩み、高知産は前年を下回り、大阪産と福岡産も前年をかなり下回った。月間全体では前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は不足感と野菜全体の高値の影響により堅調に推移した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産と熊本産が中心となり、福岡産の入荷もあった。後続の石川産も下旬にスタートした。各産地とも朝晩の気温が低く、着色遅れが生じて出荷が不安定となり、特に月の前半の入荷量が伸び悩んだ。下旬に回復傾向となったが、月間では各産地とも前年を下回り、全体では前年、平年とも2割以上下回った。</p> <p>価格は不足感から高値推移となり、旬を追うごとに上伸した。月間では前年を大幅に上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産を中心に高知産などの入荷もあった。生育期の天候不順などの影響により、着果状態が悪くなく、出荷量が少なかった。関東市場も品薄で相場が高かったことにより、関東産地からの入荷も少なく、月間全体では前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、品薄感から高値推移となり、月の後半には下落傾向となるも、月間では前年を3割以上上回り、平年を5割以上上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>鹿児島産が中心となる入荷であった。輸入の中国産の入荷もあったが、原油高や円安の影響などもあり国産との価格差が縮まってきた中で、国産の需要が高まって引き合いが強まった。しかしながら、さといも自体の需要が年々落ち込んでいる中、需要期を外れていることもあり、月間全体では前年を2割下回り、平年を4割以上下回った。</p> <p>輸入物の高騰により国産の引き合いが強まったため、高値が続いた。月間では前年を大幅に上回り、平年を2割以上上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は長崎産が中心となり、鹿児島産の残量入荷があった。長崎産は4月下旬から降雨が続いた影響により収穫作業が滞り、5月に入っても連休明けまで産地出荷量が少ない状況が続いた。その後、中旬に一時的に増加したが、再び降雨の影響で減少し、月間では前年を下回った。鹿児島産は切り上がりが早く、中旬以降に激減し、月間全体では前年を大幅に下回った。メークインは長崎産を中心に、鹿児島産の残量入荷もあった。長崎産は降雨の影響により出荷が不安定で、中旬以降に増加したが、その後増減を繰り返した。月間全体では極端に少なかった前年をかなり上回った。ばれいしょ全体では、前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、丸芋は不足感から中旬に高騰し、旬を追うごとに上伸を続け、月間では前年を大きく上回った。メークインも不安定な出荷が続く中で旬を追うごとに高騰し、高値推移となった。全体では前年を4割以上上回り、平年を2割以上上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>兵庫産が主体となり、佐賀産や大阪産などの入荷があった。主力の兵庫産は前月末の降雨の影響により、上旬は出遅れて少なかったが、中旬以降は順調な出荷となり、旬を追うごとに増加した。しかし早生種から中生種への切り替わりで、サイズは2L～L中心からL中心となり、入荷量は伸び悩んだ。国産の絶対量不足が続いた中で、業務用関係を中心に輸入の中国産へのシフトが増え、中国産の入荷は前年をかなり上回った。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、昨年から続いている絶対量不足による高値の影響が残り、入荷量が伸びない中で高値のまま推移した。輸入の中国産も原油高や円安の影響もあり、国産との価格差がほとんどない中での入荷であったため、入荷量が増えても価格を下げる要因とならなかった。月間全体では前年を4割以上上回り、平年を大幅に上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)



#### (4) 首都圏の需要を中心とした7月の見直し

5～6月にかけての価格高は、九州産を始めとする西南暖地産が早く切り上がり、東北産が遅れたためである。6月に入り冷涼地産のキャベツの出荷が出揃い、価格高騰は沈静化の方向に向かっている。

今後中心となる北海道産は、天候に恵まれ総じて順調である。一方で、北海道では野菜の作付けが減り、他作物への転作が進んでいるとの情報も多く聞かれ、輸送問題も含めて各市場は産地との密な情報交換が欠かせないだろう。しかしながら、関西市場へ出荷していた産地が関東市場へと出荷先を変更するといった展開はないと予想される。

7月は、仮に猛暑の夏となっても各産地とも昨年の教訓があるため、大幅なマイナスはなく、価格的には平年並みの展開と予想される。

#### 根菜類



だいこんは、北海道産（ようてい）の道央の産地は6月末から出荷が始まり、例年より2～3日早い。定植は順調に行われ、特にピークはなく、10月まで定量出荷されると予想される。作付けは若干の減少が報告されている。北海道産（しべちや標茶）の道東の産地は、例年と同様、7月15日から出荷が始まると予想される。作付けは6ヘクタールほど減少し、前年比95%程度である。天気は良好であるが、例年より朝晩が寒い。はしじょう播種作業は順調であり、最終出荷の10月中旬まで定量と予想している。青森産の現状はピークとなっており、6月下旬に減ってきて、7月いっぱいの出荷を予想しており、平年並みの状況である。

にんじんは、青森産の出荷は例年と同様6月20日過ぎから始まり、ピークは7月いっぱいまで8月上旬には切り上がると予想される。生育は順調で、L、Mサイズ中心と予想している。北海道産の出荷は6月20日前後のほぼ平年並みのスタートと予想される。出荷のピークは7月上旬で、販売は7月いっぱいまでと予想される。作付けは前年並みで、品種は「紅みのり」でLサイズ中心と予想している。



#### 葉茎菜類

キャベツは、群馬産の出荷は例年並みのペースで、嬬恋村の東部は6月15日頃からと予想される。7月から盛期に入り、9月まで徐々に増えながら推移し、通常通りの8玉サイズと予想される。岩手産は6月25日頃から出荷が始まり、東京市場へは7月5～10日頃からの入荷と予想される。出荷開始後すぐにピークとなり、10月いっぱいまで続くと予想される。作付けは前年並みで、前年は猛暑と干ばつにより30～40%の減収になったが、順調に推移すれば今年の出荷は前年を大幅に上回ると予想される。

はくさいは、長野産は5月下旬に出荷が始まり、6月16日の週に出揃い、20日頃からピークに入って7月もピークは続き、定量で出荷されると予想される。8月には暑さで減ることも予想される。6玉サイズ中心と予想され、作付けは前年並み、作業も順調である。

ほうれんそうは、栃木産の出荷は標高800～1400メートルの高原地帯からスタートし、6月中旬に出揃うと予想される。ピークは今後の天候によるが、全体的に雨除け栽培であることから、10月中旬まで安定して出荷できると予想している。群馬産は6月に続いて雨除け物であり、ここ数年、暑くも寒くもない天候であることから、例年並みかやや多めの出荷が予想される。ほしじょう圃場は標高300～700メートル地帯で、作付けは前年並みである。

ねぎは、茨城産の夏ねぎのピークは7月下旬の初め頃までで、その後はレタスなどの次作の準備に入る。肥大不足が影響し、現状までの実績では前年の95%と少なめとなった。青森産はハウス物が6月20日から、露地物が7月末から始まり、作付けは例年並みである。

レタスは、長野産は6月に入ってピークを迎えつつあり、現状までは適度の降雨もあり順調である。本格的なピークに入るのは6月中旬からで、7月も続く。昨年は猛暑の影響により不結球などもあったが、大きな減収に至らなかった。7月としては例年並みの出荷が予想される。群馬産の現状は肥大良好で、傷みも少ないこと

から例年をやや上回る出荷となっている。7月は例年価格が低迷しがちのため、当該月分の作付けを減らしている。前年比および当年の6月比とも、少なくなると予想している。

## 果菜類



きゅうりは、福島産の無加温物は4月定植物の出荷が5月中旬から始まった。6月には出揃ってピークを迎え、6月下旬から7月中旬に特に多くなると予想される。露地物は6月いっぱい定植されて、7月には出荷が出揃い、8月の盆前頃が最大のピークと予想される。岩手産の現状はハウス物で、9月まで出荷が続くと予想される。露地物は定植中であり、6月後半から出荷が始まって、7月にピークとなると予想している。

なすは、栃木産は夜温が低いことにより例年より7日程度遅れて露地物の出荷が始まった。雨も少ないが、かんすい灌水するため問題ない。海の日（7月15日）頃からがピークで、当面は例年並みの出荷を予想している。茨城産の露地物は6月中下旬にピークとなり、7月中旬以降は減りながら推移して、9月いっぱいまでと予想される。作付けは前年並みで、現状の生育は順調である。

トマトは、青森産の三戸の出荷は始まっているが、田子は6月からと予想される。5月末頃には低温気味となったが、総じて気温が高めで推移しており、全体としては前進気味である。ピークは盆前頃と予想している。品種はいずれも「桃太郎系」である。福島産は7月2週目から出荷が始まるが、その後、出揃うのはやや遅れる見込みである。作付けは前年を若干下回っており、昨年は秋口の低温により収量が落ちた。品種は高温下での生育に適した「桃太郎みなみ」である。北海道産は道北の産地からとなり、平年よりやや遅れて6月中旬から始まり、ピークは7月に入ってからと予想される。作付けは例年並みで、「桃太郎」の糖度を高めて仕上げている。

ピーマンは、岩手産のハウス物は始まっており、10月までと予想される。主力の露地物は7月上旬から始まり、ピークは7月末から8月

上旬の見込みである。中心品種は「京鈴」「京ひかり」で作付けは増えている。



## 土物類

ばれいしょは、静岡産の湖西の「男爵」は現状始まっており、ピークは6月下旬から7月上旬で、7月いっぱい切り上がると予想される。3～4月の低温の影響により、例年よりも小玉傾向である。長崎産は例年であれば7月上旬まで出荷があるが、今年は6月で切り上がると予想される。3～4月の悪天候により肥大が悪く、圃場での傷みもあり平年の80%作と不作である。

たまねぎは、兵庫産の現状は早生の収穫が終わって中早生の収穫中であり、なかわせ平年並みの収量・進捗状況である。6月末からは貯蔵物となり、8月いっぱいまでと予想される。前年は肥大良好で豊作傾向であったため、今年は前年比やや減と予想している。佐賀産は5月末の段階で出荷の中盤を迎え、6月は後半に入る。7月には貯蔵物となり、8月上旬で切り上がると予想される。雨が多いことが影響し、生産量は前年比やや減、平年比でも下回っている。Lサイズ中心である。北海道産は昨年、夏の高温により例年の85%作となった。今年の収穫は例年通り7月20日前後に始まると予想される。出荷の最大のピークは例年11月であり、東京での販売の始まりは7月25日頃と予想している。



## その他

ブロッコリーは、北海道産がほぼ例年と同様、6月20日前後から始まる。ここ数年この時期は、干ばつと突発的な高温が襲う傾向があり、昨年は8～9月には収穫物がなくなった。今年は雨が多く低温傾向であるが、生育に影響はなく順調で、7月10日以降にピークとなり、その後も切れ目のない出荷になると予想される。長野産の現状はハウス物で、6月5日頃から露地物も始まり、10日過ぎから7月中旬がピークと予想される。8月も減りながらも出荷は続き、9月には再び増えると予想される。

セルリー（セロリ）は、長野産の現状は加温物であり、6月には無加温物になると予想される。露地物は6月の終わり頃から始まり、7月いっぱいまでピークと予想している。生育は順調である。

アスパラガスは、福島産は3月から出荷が始まり、4月中下旬にピークが来た。その後は一定ペースで10月中旬まで出荷され、量的には前年並みを予想している。

スイートコーンは、千葉産は6月15日頃から「ピュアホワイト」が始まり、主力の「ゴールドラッシュ」は7月10日過ぎからと予想される。ピークは7月20日前後で、盆前までの出荷と予想される。作付けは前年並みである。茨城産の現状はハウス物と、一部のトンネル物が始まった。主力は露地物で6月中旬から本格化し、ピークは6月下旬から7月上旬で、7月いっぱいまで切り上がると予想される。品種は「味来」で「夏祭り」のブランド名で販売している。5月下旬に強風はあったが、影響はなかった。

すいかは、長野産の「アルプすいか」はほぼ平年と同様、東京市場で7月4日から始まり、7月20日頃にピークとなり、8月10日頃まで続くと予想される。出荷は9月13日頃までの計画で、現状の着果は順調である。山形産は平年より2～3日早く、7月10日から始まり、7月25日～8月5日がピークと予想している。品種は引き続き「祭ばやし<sup>スリーセブン</sup>」である。一部で「羅皇ザ・スイート」も新規に導入している。神奈川産は例年と同様に6月20日前後からで、ピークは7月下旬と予想される。千葉産の5月のハウス物は着果が悪く、少なめの出荷となった。現状はトンネル物となって回復し、潤沢になってきた。7月15日頃で切り上がると予想される。品種は「春のだんらん」「祭ばやし」「味きらら」などである。

こだますいかは、茨城産は2～3月の曇天続きの中での交配となったため、農家は苦戦した。そのため遅れて例年の70%程度の出荷となっている。5月下旬後半から増えて、6月中旬に

ピークとなり、7月いっぱいまでと予想される。2番果、3番果は8～9月まで出荷され、10月には抑制物になると予想される。品種は「スイートキッズ」である。7月5日頃には盛夏期の定番品種「黒小玉」も始まり、7月中下旬がピークと予想される。神奈川産の品種は「姫甘泉<sup>ひめかんせん</sup>」が中心で、7月5日頃からの出荷と予想している。

えだまめは、青森産の県南産地は例年よりも7日程度の前進となっており、7月3日頃から始まると予想される。出荷のピークは8月の盆を挟んだ時期で、8月まで多く、9月10日で切り上がると予想される。作付けは白毛系と茶豆系が半々で、茶豆系の出荷は盆明けからと予想される。品種は「湯あがり娘」「ゆかた娘」である。山形産は例年並みに7月下旬から始まり、8月がピークで9月上旬まで出荷は多いと予想される。昨年は猛暑と干ばつにより平年の80～90%作と少なかった。作付けは例年と変わらない。

さやいんげんは、福島産は5月13日から始まったが、平さやいんげん・どじょういんげんともに7月5日頃からがピークで10月いっぱいまでと予想される。作付けはやや減少している。

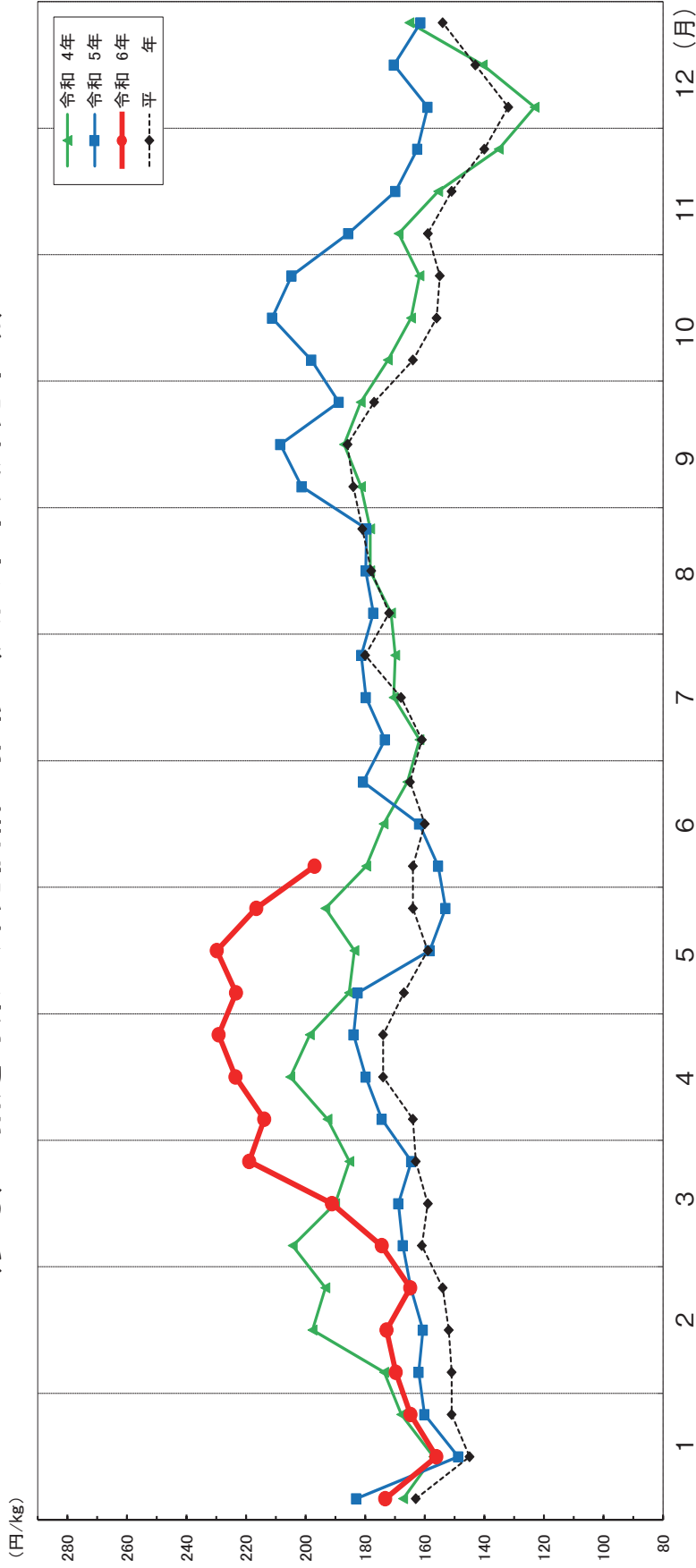
かんしょは、香川産は苗の配給がやや遅れた影響が心配され、前年よりやや遅く、6月下旬に出荷が始まると予想される。出荷のピークは7月中旬から8月上旬で、盆明けには減ると予想される。作付けは前年よりやや増えている。

れんこんは、茨城産は6月に入り令和6年産のハウス物が始まると予想される。7月中旬から露地物が始まり、台風などの風害がなければ平年並みの出荷が予想される。昨年は猛暑・干ばつの影響により1割程度の減収があった。

（執筆者：千葉県立農業大学校  
講師 加藤 宏一）



## (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬													
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161	
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197																					
平年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153		

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。